

大 都市での車の運転は、できることなら避けた。今でこそ慣れたが、奥出雲から松江に転居してしばらくは、運転するのに気が重かった。交差点はうんざりするほどあるし、歩行者もいる（奥出雲では横断歩道があつてもめつたに歩行者に出会うことはない）。

もう二十年以上も前の話だが、隠岐の島で暮らしていたころ、信号が西郷に一つだけあつた。それ以外の村であれば信号を見ずに移動できた。村の小学校で同僚だったある女性は、それが理由で西郷には車で行かない、と言っていた。信号を通過する緊張を思うと運転する気になれないらしい。彼女は嘲笑されようとも意に介さず、まじめに告白していた。凶器にもなるのだからそのぐらい臆病でいられる方がいいのかもしれない。ぼくが大都市を運転したくないのも彼女と規模が違うだけの話だ。

大阪府ではあるが、今回目指すは高槻市で、いくらか気が楽だった。ナビのおかげで道に迷うことなく、予定より早くS氏宅に到着した。車を駐車場に入れてしまえばこつちのもので、あとは自転車での移動だから初めての町でもまったく気にならない。結局、自動車はぼくにとつて重すぎるし、速すぎるのだ。高速を長時間飛ばそうとも、その思いがどこか離れない。

二日間、高槻、茨木、千里、自転車であちこち回った。幸い尻の皮も無事だったし、見る時間もすっかり取つたので、くたびれることもなかった。観光地もそれぞれにおもしろかったが、それよりも氏の開拓したサイクリングコースが楽しかった。名所旧跡の類を追うのでない、地元の人々にとつて大切な公園や神社仏閣を巡つた。よく見れば何でもなくはない何でもなさを感じられるとき、これは自転車ならではの思うのだった。

地下道で自転車を押していたら、出口の階段に行き当たつた。見ると階段脇に幅一メートルにも満たないエスカレーターがあつて、カッターシャツの袖をまくつた高校生がそれに自転車を乗せて自分は階段を歩いて上がつていた。そんなものを見るのは初めてだったので、思わず声も大きくなった。

「えっ、もしかして自転車用のエスカレーターですか、これ。へえ、さすが大阪だなあ。」

素直に感動して、ぼくも高校生に倣う。ぼくのすぐ後を三十代の主婦がママチャリをエスカレーターに乗せていて、振り向いたら目が合った。あきらかに吹き出すのをこらえている様子で、さっと目をそらされた。田舎者よと笑つているのを背中に感じたが、初自転車エスカレーターの感動はいささかも減じない。



専業ババ奮闘記（その2） 75

木幡智恵美

義母の異変（7）

我が家の玄関には、上がり口に低い台があり、二段階で上がり下りできるようになっている。玄関の上がり口、義母の部屋に続く廊下に手すりがあり、トイレにも二か所つけている。義母が車椅子を使うようになってからは、玄関まで車椅子で運び、何とか手すりを使って二段を下りてもらい、玄関に置いた椅子に座ってデイサービスの迎えを待つことにしていた。

ところが、ついこの間から義母の左脚が動かなくなり、車椅子から降りることすらできなくなつた。そこで、夫はホームセンターに行つて材料を買つてきて、急ごしらえで玄関にスロープを作つた。車椅子プラス義母の重みに耐えるよう、支えを作り、その上に一枚のコンパネを乗せるのだ。使わない時は取り外せばよい。重い板を運ぶのは一苦労だが、デイサービスや病院に行く時にはそれを組み立て、車椅子ごと義母を移動させることができる。

その日は、娘が三人の子どもを連れて我が家に来ていた。夕方三人を私たちに預け、娘は歯科へ。一時間ほど経つて、義母がデイサービスから帰り、組み立てたスロープを使って車椅子ごと家に入るとすぐ、子どもたちがいる台所に連れて入つた。夫に宗矢を預け、デイサービスの靴から洗濯物を出して洗濯機に入れに行つた時だ。「お母さん」と叫ぶ夫の声。慌てて台所に向かうと、ちょうど娘が玄関から飛び込んだところだった。娘は夫から宗矢をもぎ取るようにして抱き、宗矢は大きな口を開けたまま体をのけぞらせている。これか、と思つた。しばらくすると、宗矢は息を吐き出したが、顔は紫色になり、ぐったりと娘の胸に倒れこんだ。娘の帰りが遅く、夫と私だけではどうなつていただろう。

泣き入りけいれんではないが、娘が初めて熱性けいれんを起こしたのは、一歳半の時だった。当時は広瀬に住んでいて、道を挟んだ向かい側に小児科があり、風邪をひいて熱を出した娘を診てもらいに行つた時だ。トイレに連れて行き、膝を抱えて小用をさせていると、腕にずしりと重さを感じた。娘の顔を覗くと、目がうつろになり涎を垂らしている。慌てて診察室に飛び込み看護師さんに診てもらおうと、「けいれんですね」とこともなげに言われた。初めてだったのでおろおろしたが、医院の中だったので助かった。

今回はあの時以上のドキドキだ。あのまま息を吐かなければ…考えるだけで胸が苦しくなる。娘の腕の中で紫色の顔をしたまま目を閉じている宗矢の回復を見守るしかなかった。

30代フリーター やあ、ジイさん。衆院選は自民党が絶対安定多数を確保したものの議席を減らし、立憲民主党はそれ以上に後退した。これと対照的に日本維新の会の躍進がきわだった。年金生活者 与野党を問わずほとんどの政党がバラマキ合戦に参戦し、国のふところが心配されている中で、維新はバラマキに必要な経済成長を強調し、それが支持を集めたと見ることができる。

バラマキの財源は日銀券を印刷しさえすればいくらでも確保できる。理論上はそれで政府が破産することはあり得ない。しかし、いくらカネをばらまいても、モノやサービスが供給されなければ、そのカネの価値は等しい。それは財政インフレと呼ばれ、政府は破産しなくても国民は破産状態に置かれる。

モノやサービスが十分に供給されるには経済成長が必要だ。しかも、それらのモノやサービスは買いたくなる魅力を用意していなければならない。資本

政権によって「大きな政府」路線にあると戻りした。

「小さな政府」路線がふたたび登場したのは、小泉純一郎がまさかの首相の座を勝ち取ったときだ。彼は「官から民へ」をスローガンに郵政民営化を推し進め、日本に新自由主義を導入した首相として称賛と批判を浴びた。しかし、そのあとの3代の自民党内閣で「小さな政府」路線はしばらく続く。

それを部分的に復活させたのが民主党政権だった。「官僚主導から政治主導、国民主導へ」というスローガンはその表現でもある。もともと民主党の経済政策のベースには新自由主義的な考えがあった。「1998年綱領」と呼ばれているこの党の「基本理念」には「経済社会においては市場原理を徹底する」と書かれている。もし伝統的な「大きな政府」路線をとっていたら、2009年の政権交代はなかっただろう。

ただ、つけ加えておくと、1998年綱領は「あらゆる人々に安

主義の高度化で家計に占める選択的消費の割合が必需的消費のそれと肩を並べるまでにふくらんだ現在、「必要」だけでは経済全体を回すほどの消費は喚起されないからだ。

魅力ある商品をつくるにはイノベーションが欠かせない。それを動機づける規制緩和が今の日本では不十分であり、既得権益を守ろうとする力がその改革を阻んでいる。だから、経済成長が鈍化し、給料も上がらない。そんな維新の主張が一定の支持を広げていると見ることが出来る。

30代 どっちにしても政権交代にはほど遠い結果だった。

年金 今回の衆院選は、日本で政権交代が起きにくい理由のひとつをあらわにした。言い換えれば、今の日本の与党と野党第1党は「大きな政府」路線で一致しており、そのぶん政権交代の余地を狭めている。

アメリカやイギリスでは「大きな政府」路線と「小さな政府」路線の政党がそのときの経済情勢に応じて交互に

心・安全を保障し、公平な機会の均等を保障する、共生社会の実現」も目指すとしており、「大きな政府」路線をまったく排除していたわけではない。もし完全に排除していたらやはり政権を取ることはできなかっただろう。露骨な弱肉強食を日本人が受け入れるこ

政権を担ってきた。日本では戦後長いあいだ「小さな政府」の政党が存在せず、保守政党も革新政党ともに「大きな政府」を基本路線としてきた。

両者の違いは経済政策にはなく、外交・安保政策にあった。自民党と社会党が議席を分け合った55年体制がそれだ。敗戦国の日本が戦勝国のアメリカに逆らうのはほとんど不可能で、日米安保条約に反対し、自衛隊を違憲と主張した社会党は政権を担うことができず、自民党の長期政権が定着した。

30代 それでも1993年の細川連立政権、2009年の民主党政権と、政権交代は起きた。

年金 戦後政治の中に「小さな政府」路線が一定の力を持つて登場したことがそのきっかけとなった。小沢一郎の『日本改造計画』は新自由主義的な考えを基調とした著作であり、小沢はその考えのもとに自民党を割って新党をつくり、細川連立政権を成立させた。しかし、「小さな政府」路線は芽吹かないまま、そのあとに成立した自社さ

とは想定しがたいからだ。

30代 今の立憲民主党はいつか政権交代の主役になることができるだろうか
年金 旧民主党系の野党が推す無所属候補が自民党の公認候補を破った参院静岡選挙区の補選は、2009年に民主党政権が誕生したときの構図に似たところがある。最大の類似点は、立憲民主党、国民民主党が共産党と選挙協力をせず、逆に戦いながら、自民党に勝つたことだ。09年に共産党は比例区に集中するとして小選挙区の候補者をしぼったが、それがなくてもこのときの民主党は自民党に勝つただろう。

このことから言えるのは、野党が政権を奪取できるのは、共産党の助けがなくても自民党を倒せるほどの勢いがあるときだということだ。ただし、それは共産党との選挙協力が無駄だったという意味ではない。今回の衆院選でもつと議席を減らしていたら、立憲はそれではますます国民に頼りにされなくなり、政権交代は遠のくばかりだ。

ニュース日記 807
中村 礼治

なぜ維新が躍進したのか